

2026 年 10 月 18 日（聖霊降臨後第 21 主日、A 年特定 24）

メッセージ

「刻印」

（マタイによる福音書 22: 15-22）

司祭ヨセフ太田信三

「皇帝に税金を納めるのは許されているでしょうか、いないでしょうか。」ファリサイ派の弟子たちとヘロデ党の人々が主イエスに問いかけました。これは巧妙に仕組まれた罠です。当時イスラエルを支配していたローマ帝国への納税は、ユダヤ人にとって経済問題であると同時に宗教的な問題でした。ローマ皇帝は神格化されており、皇帝への納税は、イスラエルの神への忠実さを問う問題でもあったからです。主イエスが「皇帝に税を納めるべきだ」と答えれば、ローマの支配を認める不信仰者だと非難し、人望を失墜させることができます。逆に否定すれば、ローマへの反抗者として訴えることができます。どちらを答えても、主イエスを陥れることができる恐ろしい罠です。

彼らの悪意に気付いた主イエスは、「偽善者たち」と呼びかけます。「税金に納める硬貨を見せなさい」と言われた彼らは、デナリオン銀貨を差し出しました。そこにはローマ皇帝の肖像が刻まれています。皇帝への納税を問題にしながら、彼ら自身も皇帝の貨幣を使い、その支配の下で暮らしていました。銀貨を差し出すことで、その事実を自ら明らかにしてしまったのです。日常生活では貨幣に刻まれた皇帝の肖像を問題にしないのに、主イエスを罠にかけするために敬虔ぶる姿は、「この民は唇で私を敬うが、その心は私から遠く離れている」（マタイ 15:8）という言葉そのものです。

主イエスは、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と言われます。ここで心に留めたいのは、銀貨に刻まれた「肖像」です。その原語は「エイコーン」で、「似姿」とも訳されます。創世記において、神はご自分の似姿として人間を造られました。人間には神の似姿が刻まれているのです。また、神はその律法を人々の心に記すと約束されました（創世記 1:26、エレミヤ書 31:33 参照）。ファリサイ派の人々は硬貨に刻まれた皇帝の肖像を見ていますが、自分自身が「神の似姿」であることを忘れてしまっています。主イエスの「神のものは神に」という言葉は、他ならぬ「あなた」に神の像が刻まれていることを思い起こさせます。「神の刻印があるあなた自身を、神にささげなさい」という招きとして受け止めることができるのです。主イエスはこうして、自らを陥れようとしたファリサイ派の人々をも、まことに神に従う道、神の似姿として自らをささげ、神とともに生きる道へと導こうとされたのです。